

樂園 第1話

takamiism

『穴がない』

「あれ、どこだったかな？」

「何か、探しもの？」

「うん、穴を」

「え、穴？」

「世界の穴」

「それ、何？」

「この世界には穴がないな、と思ってね」

「穴なら、いくらでもあるんじゃない？」

「たとえば、部屋には出口があるよね？」

「開かずの間、というものもあるけど」

「たとえ開かなくても、扉はあるわけだ」

「一応、部屋だからね」

「家には、ドアがあるよね？」

「鍵が、かかっていたりはするけど」

「壊せば、出入りできるわけだ」

「一応、家だからね」

「ところが、この世界には、それがない」

「この世界？」

「この現実、というべきかな」

「どういうこと？」

「どこまで行っても、現実だよ」

「どこまでも？」

「そう、はてしなく」

「空想や妄想は、現実にはないんじゃない？」

「まず、空想や妄想として、現にあるんじゃない？」

「でも、現にないから、空想や妄想と呼べるような」

「現にないという形で、あるわけだ」

「ないけど、あるの？」

「まず、空想や妄想は、空想や妄想として、出現しなければならない」

「変な言い方をするね」

「空想や妄想以外にも、当てはまるよ」

「というと？」

「何かがあるにせよ」

「ないにせよ」

「まずは、それとして出現しなければならない」

「出現しなければ、どうなるの？」

「何も」

「ない、ということ？」

「いや、少し違うかな」

「どこが？」

「何も起こらない」

「やっぱり、ないわけだよね？」
「あるとか、ないとか言う以前の、『あり・なし』の手前の話をしているんだよ」
「その手前というのは、どこにあるの？」
「はてさて」
「え？」
「そこというか、それというか」
「ぼんやりしているね」
「目には見えないもので」
「へえ、そういうものなんだ」
「目に見えるものを通して、浮かび上がってくるというか」
「でも、そういうものとしてあるんでしょ？」
「あるとも、ないとも、言えない」
「どちらでもない？」
「どちらとも言えない」
「よくわからないけど」
「現実を語りつくすには、言葉が足りない」
「どうして、足りないのかな？」
「さあ、わからない」
「あっさりと、認めるね」
「わからないことが、わかったからね」
「だから？」
「もう十分だね」
「ここで終わり、ということ？」
「いや、また新しく、ここから始まる」
「ここは、どこ？」
「それは、すばらしいね」
「そうかな」
「その質問には、穴がない」